



蕉風正斧



俳諧 故人六百題

六百

東都書肆

安政堂藏梓

俳諧故人六百題序  
霄壤之間有情無情千羅萬象  
不能逃騷人韻士之筆端蒼顏  
佻字鬼哭信哉俳諧者十七字  
出短調也其言庸而其意有餘  
至於感鬼神化風俗豈但嘲弄



厥月而尺矣元祿年聞芭蕉翁  
桃青也者長其技一時風靡然  
而後學不得其人其志淫其詞  
浮終失鳳化之道矣頃有白雄  
翁者繼遺風迴頽瀾盡歸之於  
正其徒鳴於海內者多矣近今

能鳴者八人曰春鴻曰保吉曰  
黎翁曰長翠曰葛三曰道彦曰  
巢北曰碩布是也碩布耋久尤  
長其技其齒垂百歲蒼顏龐眉  
翼鬮確蓄於關東耋人者予心  
莫送出友也接辭於世外對林



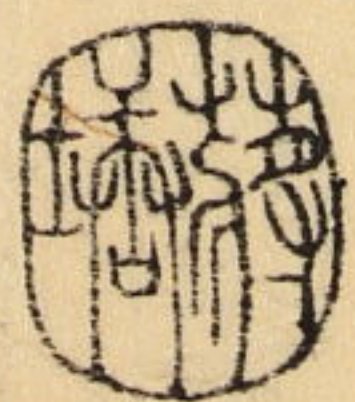
於雲裡有率矣一日敲松扉出  
袖中之卷謂予曰先師白確翁  
與其徒所嗟咏者也今撰其遺  
逸者得數千首分題衷之每題  
加自尺所詠者更補其尺題命  
曰古人六百題集將以壽梓傳

其道於後來請題一言予乃披  
閱而嘆賞且疑其題名其師與  
其徒凡九翁而曰曰八翁者蓋  
盡人謙讓不廁其數也噫乎世  
之貪名者觀此則當愧死焉此  
一事亦足以感化世俗況卷中



綴玉裁錦使人感化者豈待予  
之言乎為之序  
天保十四年歲在癸卯夏五月  
上毛白井知足庵如是道人歛  
之題

石月山史天竹培造



此法有子字信初の月の嵐手候  
物々や天然の理存きりりりりり  
際元録の西郷往流意亭院手  
中江部初子最の心とそし初可方主  
英名の宗匠出亭又、昔時の心程  
に漢江中より公権結士実亭



一家を好しし  
其天下に志あり  
人少く其志を  
我友に有る人  
年以て母情あり  
拾ひ集め六右  
願集と稱す本  
志願ありし  
乃其の如き  
乃其の如き  
乃其の如き  
乃其の如き

情は清く  
夜に月あり  
先んじて  
敬み代り  
道樂あり  
一と記す



かきく亭 需子 和名 宗元 結 形 呈

弘化丁未 既夏

古杉坡老人 遺鳥 誌

平濟 宗人 宗書



凡例

- 一 故人 結 遠 吟 四 時 を 次 有 志 不 善 不 蒙 且 を 始 子 藝 夏 八 生 詠 於 以 今 家 冬 八 傳 九 秋 と 意 々 款 の 款 款 を 分 ち 出 せ ざる 人 今 々 初 學 の 見 處 一 々 志 ぬ 其 の 如 かり
- 一 兄 脚 不 雄 の 句 集 五 友 字 七 文 字 中 一 句 八 テ ニ ヲ ハ の 相 違 一 一 語 再 考 の 所 方 札 の 有 り
- 一 家 々 の 句 集 五 句 一 吟 十 撰 出 せ 依 八 先 河 在 世 甚 壯 隆 中 撰 款 の 所 案 一 句 八 一 句 時 了 筆 記 せ 一 句 一 句 亦 少 一 句 八



一 所念わく多しとのりも歌を分りて  
 凡そ六の四十有餘生の因の是の吟唱は  
 光脚歌布自記を補く首尾を  
 九に終る  
 石の條く亡脚は前のるを何加ゆか  
 りし志りのり

送弟  
 鳥野龍  
 右筆 徒



# 俳諧故人六百題目錄

## ▲春の部

### ○菜旦

名	二丁	と	おのま	二丁	と	其	二丁	並	の	ま	二丁
立	二丁	茅	所	二丁	神	空	二丁	神	鳥	二丁	
門	二丁	松	水	二丁	神	日	二丁	水	才	二丁	
菊	三丁	栞		四丁	着	衣	始	四丁	寐	讀	
梅	四丁	蓮	某	五丁	年	玉	五丁	法	摩	五丁	
唐	五丁	荏	卷	五丁	春	著	六丁	弓	始	六丁	
和	六丁	松	の	子	六丁	争	好	子	六丁	水	
										祝	六丁
○植物											
梅	七丁	柳		七丁	松	の	卷	六丁	栞		八丁



小松引	八丁	概	一丁	紅毒	九丁	神	二丁	九丁
神梅	九丁	花	九丁	梅	十丁	連梅	十丁	十丁
連翹	十丁	梨の茎	十一	海棠	十一	辛夷	十一	十一
柿木	十一	梅	十二	馬蹄木	十二	木の芽	十二	十二
紫陽	十二	菜	十二	芥	十三	古	十三	十三
名草	十三	草の料	十四	莖	十四	蒲の葉	十四	十四
櫻科	十四	葉の茎	十五	摺	十五	蕨	十五	十五
科梅	十五	杉	十五	薊	十六	草	十六	十六
菜の茎	十六	種	十六	種	十七	菊	十七	十七
菜植	十七	山吹	十七	木	十七	茅	十八	十八
芦の角	十八	藤の茎	十八	竹の根	十八			
○生類								
号	十九	維子	十九	号	二十	号	二十	二十

助	二十	麦	二十	薺子	廿一	号	廿一	廿一
巢	廿一	歸	廿一	号	廿一	乙	廿二	廿二
標	廿二	鮭	廿二	蜂	廿三	蛇	廿三	廿三
鱧	廿三	種	廿三	河	廿三	蛤	廿四	廿四
鰻	廿四	馬	廿四	白	廿四	鮎	廿四	廿四
梅の茎	廿五	麻の角	廿五	魚	廿四	汲	廿四	廿四
○降物風解								
海	廿五	号	廿五	号	廿五	号	廿六	廿六
雪	廿六	号	廿六	別	廿七	号	廿七	廿七
東風	廿七	号	廿七					
○天象降物								
号	廿八	獲	廿八	号	廿八	陽	廿九	廿九



○神釋  
 彼岸 三十 涅槃 三十 華入 三十 梅多系 三十

○乾神

神子日	世一	人	日	世七	種	世一	龍	因	世一
三神	世二	修	多	世三	海	之	海	世三	依
山笑	世二	出	代	世二	教	入	世二	橋	世二
其の表	世三	其の	日	世三	永	日	世三	長	世四
水	世四	其の	水	世四	春	の	海	世四	其の
其の	世五	焼	時	世五	神	神	世五	正	世五
二月	世六	孫	生	世六	上	已	世六	西	世六
離	世六	神	修	世六	海	苔	世七	沙	世七
炉	世七	室	舍	世七	相	步	世七	田	世七
其の	世八	引	星	世八					

▲夏の部

○生類

時	一丁	鴻	鳥	一丁	鶴	鳥	二丁	鳥	二丁
水	二丁	鰻	鰻	二丁	鰻	鰻	三丁	鰻	三丁
物	三丁	鰻	鰻	三丁	鰻	鰻	四丁	鰻	四丁
時	四丁	鰻	鰻	四丁	鰻	鰻	五丁	鰻	五丁
夏	五丁	鰻	鰻	五丁	鰻	鰻	六丁	鰻	六丁
夏	六丁	鰻	鰻	六丁	鰻	鰻	七丁	鰻	七丁
夏	七丁	鰻	鰻	七丁	鰻	鰻	八丁	鰻	八丁
夏	八丁	鰻	鰻	八丁	鰻	鰻	九丁	鰻	九丁
夏	九丁	鰻	鰻	九丁	鰻	鰻	十丁	鰻	十丁

○植物

夏	九丁	鰻	鰻	九丁	鰻	鰻	十丁	鰻	十丁
夏	十丁	鰻	鰻	十丁	鰻	鰻	十一丁	鰻	十一丁
夏	十一丁	鰻	鰻	十一丁	鰻	鰻	十二丁	鰻	十二丁
夏	十二丁	鰻	鰻	十二丁	鰻	鰻	十三丁	鰻	十三丁
夏	十三丁	鰻	鰻	十三丁	鰻	鰻	十四丁	鰻	十四丁
夏	十四丁	鰻	鰻	十四丁	鰻	鰻	十五丁	鰻	十五丁
夏	十五丁	鰻	鰻	十五丁	鰻	鰻	十六丁	鰻	十六丁
夏	十六丁	鰻	鰻	十六丁	鰻	鰻	十七丁	鰻	十七丁
夏	十七丁	鰻	鰻	十七丁	鰻	鰻	十八丁	鰻	十八丁
夏	十八丁	鰻	鰻	十八丁	鰻	鰻	十九丁	鰻	十九丁
夏	十九丁	鰻	鰻	十九丁	鰻	鰻	二十丁	鰻	二十丁



葉の花	十一	橘	十一	相の花	十一	橘	十一
葉の折	十二	葉の葉	十二	葉の葉	十二	葉の葉	十二
聖葉	十三	杜若	十三	蘭	十三	葉の葉	十三
葉の折	十四	葉の葉	十四	浮州	十四	百合	十四
葉	十五	葉	十五	葉	十五	葉	十五
大角	十六	葉の葉	十六	葉	十六	葉	十六
葉の折	十七	葉	十七	葉	十七	葉	十七
葉の折	十八	葉	十八	葉	十八	葉	十八
葉の折	十九	葉	十九	葉	十九	葉	十九
葉の折	二十	葉	二十	葉	二十	葉	二十

河者 廿一 浮州 廿二 葉州 廿三 浮州 廿四

○ 浮州 廿一 葉州 廿二 浮州 廿三 葉州 廿四

○ 葉 廿一 葉 廿二 葉 廿三 葉 廿四

葉 廿一 葉 廿二 葉 廿三 葉 廿四

葉 廿一 葉 廿二 葉 廿三 葉 廿四

葉 廿一 葉 廿二 葉 廿三 葉 廿四

葉 廿一 葉 廿二 葉 廿三 葉 廿四

葉 廿一 葉 廿二 葉 廿三 葉 廿四

葉 廿一 葉 廿二 葉 廿三 葉 廿四



○乾坤

十月	廿九	終	初	廿九	終	初	廿九	終	初
九月	廿八	終	初	廿八	終	初	廿八	終	初
八月	廿七	終	初	廿七	終	初	廿七	終	初
七月	廿六	終	初	廿六	終	初	廿六	終	初
六月	廿五	終	初	廿五	終	初	廿五	終	初
五月	廿四	終	初	廿四	終	初	廿四	終	初
四月	廿三	終	初	廿三	終	初	廿三	終	初
三月	廿二	終	初	廿二	終	初	廿二	終	初
二月	廿一	終	初	廿一	終	初	廿一	終	初
正月	廿	終	初	廿	終	初	廿	終	初

○天象

十月	廿九	終	初	廿九	終	初	廿九	終	初
九月	廿八	終	初	廿八	終	初	廿八	終	初
八月	廿七	終	初	廿七	終	初	廿七	終	初
七月	廿六	終	初	廿六	終	初	廿六	終	初
六月	廿五	終	初	廿五	終	初	廿五	終	初
五月	廿四	終	初	廿四	終	初	廿四	終	初
四月	廿三	終	初	廿三	終	初	廿三	終	初
三月	廿二	終	初	廿二	終	初	廿二	終	初
二月	廿一	終	初	廿一	終	初	廿一	終	初
正月	廿	終	初	廿	終	初	廿	終	初

○植物

十月	廿九	終	初	廿九	終	初	廿九	終	初
九月	廿八	終	初	廿八	終	初	廿八	終	初
八月	廿七	終	初	廿七	終	初	廿七	終	初
七月	廿六	終	初	廿六	終	初	廿六	終	初
六月	廿五	終	初	廿五	終	初	廿五	終	初
五月	廿四	終	初	廿四	終	初	廿四	終	初
四月	廿三	終	初	廿三	終	初	廿三	終	初
三月	廿二	終	初	廿二	終	初	廿二	終	初
二月	廿一	終	初	廿一	終	初	廿一	終	初
正月	廿	終	初	廿	終	初	廿	終	初



早稲	十五	吹綿	十五	落穂	十五	西瓜	十六
籾	十六	葎	十六	葎	十六	葎	十六
神葎	十七	卜	十七	竹の葉	十七	葎	十七
今の葉	十八	葎	十八				

○生類

鶯	十八	渡鳥	十八	百舌鳥	十九	鶯	十九
木啄鳥	十九	鶯	十九	石	十九	屋敷の鶯	二十
鳩	二十	鶯	二十	乙鳥	二十一	小鶯	二十一
鶯	二十一	鶯	二十一	鶯	二十一	鶯	二十一
鶯	二十二	鶯	二十二	鶯	二十二	鶯	二十二
鶯の鶯	二十三	鶯の鶯	二十三	鶯の鶯	二十三	鶯の鶯	二十三
鶯	二十四	鶯	二十四	鶯	二十四	鶯	二十四
鶯	二十五	鶯	二十五	鶯	二十五	鶯	二十五

鶯	廿六	鶯	廿六	鶯	廿六	鶯	廿六
---	----	---	----	---	----	---	----

○降油風神

降油	廿七	降油	廿七	降油	廿七	降油	廿七
風	廿八	風	廿八	風	廿八	風	廿八

○神釋

燈籠	廿九	燈籠	廿九	燈籠	三十	燈籠	三十
迎火	三十	迎火	三十	迎火	三十	迎火	三十
葎	三十一	葎	三十一	葎	三十一	葎	三十一
送火	三十二	送火	三十二	送火	三十二	送火	三十二

○衣食

新給	三十二	新給	三十二	新給	三十二	新給	三十二
新葎	三十三	新葎	三十三	新葎	三十三	新葎	三十三

○乾坤







神	河豚	豆	納豆	指	巨	炉	鉾	追	不	考
月	豚	袋	豆	豆	燧	用	鱒	多	冬	考
二十	十九	十八	十七	十六	十五	十五	十二	十三	十二	十一
神	干	袋	茶	糸	炭	炉	鱒	和	鱒	子
送	雞	食	食	食	食	食	鱒	鱒	鱒	子
二十	十九	十八	十七	十六	十五	十五	十三	十三	十三	十二
神	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒
の	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒
當	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒
り	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒
二十	十九	十八	十七	十六	十五	十五	十三	十三	十三	十二
連	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒
意	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒	鱒
二十	十九	十八	十七	十六	十五	十五	十三	十三	十三	十二

○火種 衣食

○神 釋

神	松	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬
冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬
廿三	廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四
神	松	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬
冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬
廿三	廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四
神	松	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬
冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬
廿三	廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四

○乾 神



○ 雑書

師	二十	長	世	年	世	年	世	年	世
身	世	世	世	世	世	世	世	世	世
直	世	世	世	世	世	世	世	世	世
唐	世	世	世	世	世	世	世	世	世
年	世	世	世	世	世	世	世	世	世

標目畢

俳諧歌入六百題

春之部

歳旦

元日

元。や大樹乃ちわらの人あり白雄  
 元。の庵ありちもや炭のをも春鴻  
 一と路の元。まわちけき世しみる彦  
 元。や惘子きくいの一の宮魚兆  
 元。身不絶橋の多えあを来碩布  
 今朝の春  
 坊みく海を見松をけきの妻白雄

春之部



俗人の心くししきさるるを 梨翁  
店との梅子戸淋しきさの春 碩布  
まの春

柳柳 柳葉の眼身しりの春 白雄  
まの春 菜葉も春始と相見しり 彦彦  
初春と心くししきさるるを 梨翁  
初春也 心くししきさるるを 碩布

花の春  
春葉の心くししきさるるを 保吉  
心くししきさるるを 梨翁  
心くししきさるるを 葛三

星の春 梨翁  
何も心くししきさるるを 碩布  
長翠

五春

杉の木も春 梨翁  
朝起や心くししきさるるを 梨翁  
あまの月夜 梨翁  
村金の春も 梨翁  
碩布

芦原

芦原と心くししきさるるを 春彦  
芦原也 心くししきさるるを 碩布  
初空



初堂や波うけしつる水乃の  
初堂や波うけしつる水乃の  
初堂や波うけしつる水乃の  
初堂や波うけしつる水乃の

初鳥

御城より出ると見えたりと馬  
勢追の馬は信乃也初よりす  
別殿より信乃は初よりす  
本も初も信乃は初よりす

門松

元政の松もかきく寸老の門  
立松ふきく寸老の門  
立松ふきく寸老の門  
立松ふきく寸老の門

門松よきの咲く山家ら  
門の松よきの咲く山家ら  
門の松よきの咲く山家ら  
門の松よきの咲く山家ら

若水

若水や元玉門あのか  
若水や元玉門あのか  
若水や元玉門あのか  
若水や元玉門あのか

若水や女の子のきぬら  
若水や女の子のきぬら  
若水や女の子のきぬら  
若水や女の子のきぬら

初日

若水や女の子のきぬら  
若水や女の子のきぬら  
若水や女の子のきぬら  
若水や女の子のきぬら



初ハツのツキ海ウミ月ツキも鯛タイふ見ミ申ウケるナリ 萬三  
 車クルマ力チカラ等トの初ハツ見ミふりハ 長ナガ翠スイ  
 懸ケくスおのらぬぬまらしのヒ出デ 碩シク布フ  
 惠ヱ方カタ  
 魚イサ方カタのヒ出デ 春ハル流リウ  
 宿ヤドのヒ出デ 保ホ吉キチ  
 意イ近チカふスおのらぬぬまらしのヒ出デ 碩シク布フ  
 萬マン歳サイ  
 萬マン葉エフのヒ出デ 白シロ雄ユ  
 万マン人ニンさしおのらぬぬまらしのヒ出デ 万マン三サン

万マン才サイのヒ出デ 萬マン三サン  
 萬マン葉エフのヒ出デ 梨リ翁ウ  
 万マン才サイ小コ高タカいいままをを高タカいいまま 保ホ吉キチ  
 宿ヤドのヒ出デ 巢ネ兆チョウ  
 宿ヤド帳チヤウふス近チカ万マン葉エフのヒ出デ 碩シク布フ  
 標ヒラカ  
 申ウケつスふスけケやヤ孫マコをを見ミたタるル喜ヨシ 春ハル流リウ  
 標ヒラカやヤるルもモ初ハツ見ミふりハ 萬マン三サン  
 申ウケつスふスけケのヒ出デ 碩シク布フ  
 着キ衣イ始シ  
 仕シ合カのヒ出デ 萬マン三サン



綴糸をぬくまも 柿す 着衣始  
 春 粟兆  
 裸糸も立早う 柿す 柿す 柿す  
 春 碩布

床積

い糸つむや 柿す 柿す 柿す  
 春 碩布  
 二日あも 柿す 柿す 柿す  
 春 碩布  
 以糸ほむや 柿す 柿す 柿す  
 春 碩布

福壽州

見く 柿す 柿す 柿す  
 春 碩布  
 福壽州 柿す 柿す 柿す  
 春 碩布  
 海山 柿す 柿す 柿す  
 春 碩布

蓬萊

蓬萊やうの 柿す 柿す 柿す  
 春 碩布  
 ほくらの 柿す 柿す 柿す  
 春 碩布  
 蓬萊よ 柿す 柿す 柿す  
 春 碩布  
 蓬萊を二 柿す 柿す 柿す  
 春 碩布

年布

手巾の 柿す 柿す 柿す  
 春 碩布  
 年玉の 柿す 柿す 柿す  
 春 碩布  
 青玉を 柿す 柿す 柿す  
 春 碩布  
 青慶  
 鰻小 柿す 柿す 柿す  
 春 碩布



ほつ 岸をくたふわいさる由敷外 葛三  
拾ふとも拾ふも由敷外なりぬ 巢北  
市人のありしとてありし由敷外 碩布

屠蕪

口ふ句く小瓶に 椒酒をまじりし 白雄  
をし 眠き 夢久やまのゆい外 巢北  
原屋内やまのうらとせをさす 碩布

雜煮

旧津 蒸の口くちをたす 仁外 葛三  
魚の入歯をかえす 雜煮 梨翁  
山寺の雜煮ふ拾ひなりし 春熊

まき 所々くふと出す 雑煮 碩布

右箸

山折 昔右箸のゆふも 祝いの菊 白雄  
右箸を火付しふきふ山の家外 巢北  
右はしを持て遊ばる子供なり 碩布

弓始

立向 小占いしや 弓始 碩布  
見方 他人のしめりし 碩布

初夢

初夢 せんや傘さす 張果老 みる彦  
さら 弟や笑ふこととて 梨翁



初着やまらりし神ふ浦巻ん  
一葛三  
御申かんや五十二次花とまき  
碩布

教の子

教の子や徳い何のまき春もきん  
葛三  
うづのりや花り杜氏り自分家  
みち彦  
教の見ふ教れ子の教をあちち  
碩布

き羽子

世の中を志と羽子板孔く表  
白雄  
厚し羽子や秋とまきは春り家  
春徳  
まき羽子の淵く厚くや鶴の井  
巢北  
やりまこの春の行る見ふ  
蝶 雀  
碩布

水鏡

こつつまの世ふ解何く水鏡い  
白雄  
年くふあつてつてあき水鏡い  
碩布

植物

梅

う光る多や袖引くけし物の糸  
白雄  
梅折る吾れ鼻先通るきり  
夫 酒  
為好木もさやりもは梅の女  
保吉  
黄く後思ふふ梅いさやか  
みち彦  
梅は月公家の杖歩り見守り  
長翠  
う光折る花をさふちりぬ山のく  
葛三



梅の多や夏にわたりきをかき  
すげのしも梅ふすあんな杉田道  
新能を伸 阿うう咲野梅う都  
梨翁 巢兆 碩布

柳

西月の霜より古むら柳 阿ら  
梅阿けの餅をうけし守柳卦  
春事の出しゆあす柳可羅  
門きくく柳ううくの月夜う都  
柳見く春寒よりいららふう  
五十手柳なる新婦喜もあし  
芳見く柳候をゆる柳の都  
梨翁 長翠 葛三 保吉

青空ふちれく米跡柳あま茶  
土境懐きくく風風の柳う都  
菓兆 碩布

松花

松のちち村めき法も静あり  
急なくく自那さのいや松の都  
葛三 碩布

梅

茶表ふかあうう梅咲く  
庭の梅果報やけくくさのあなり  
義深き喜ふも多る梅あな  
ひかりくくみ申れも又赤つもま  
岩盤本のおとく見えあ法をまふ  
白雄 みる彦 葛三 保吉 碩布



小松引

松山を通りさきや  
小松曳  
始松や聖老の松あり及き  
幾昔多しりや伊勢う小松引  
里の子や子此のさきの小松曳

桃

家阿るまき桃の中を遊入男  
古き世の跡はらけいり桃のうけ  
所園のおい家中の桃のさき  
あや先の表ともあらき桃のち  
桃をわき船の板なるを不登

白雄  
葛三  
みち彦  
頑布

白雄

保吉

みち彦

葛三

栗兆

あはれ〜嘆すあさき〜孔を

頑布

紅梅

春のうけ梅とちあきまうけ男  
紅梅や武士の子孔あき〜是  
紅梅をけさい佛ふま向き程  
紅梅ふひまか〜法し所鷹名  
紅梅やあちきちあき〜の葉名

初花

初花ふ〜つ子も物の友の〜う柳  
まら世や憐子おとにあら〜見〜  
初花のち〜村人お見〜きり〜

白雄

保吉

みち彦

栗兆

頑布

保吉

葛三

みち彦



初春とまのむすのけのけのけ

礪布

初梅

あう子みく出陣し梅し初梅  
鳥多ふ初梅の梅し梅し梅し  
家し梅し梅し梅し梅し梅し  
遠久見る年い梅し梅し梅し  
う梅の梅し梅し梅し梅し梅し

礪布  
礪布  
礪布  
礪布  
礪布

花

春の嵐あらしき梅し梅し梅し  
おの戸ふ梅し梅し梅し梅し  
静い梅し梅し梅し梅し梅し

礪布  
礪布  
礪布

おの梅し梅し梅し梅し梅し  
おの梅し梅し梅し梅し梅し  
おの梅し梅し梅し梅し梅し  
おの梅し梅し梅し梅し梅し  
おの梅し梅し梅し梅し梅し

礪布  
礪布  
礪布  
礪布  
礪布

梅

おと梅し梅し梅し梅し梅し  
人の梅し梅し梅し梅し梅し  
三月の梅し梅し梅し梅し梅し

礪布  
礪布  
礪布



咲くちと花満しとありのりり  
 山橋誰と見せれとありのりり  
 水の月と橋とありのりり  
 船の宮と橋とありのりり  
 深山木と先通とありのりり  
 中ししと橋とありのりり  
 土地病と木病とありのりり  
 昔さく素雲とありのりり

連翹や流木志とありのりり  
 梨の花

長翠  
 梨花  
 保吉  
 巢北  
 碩布  
 巢北  
 長翠  
 巢北  
 碩布

連翹や多ふりしとありのりり  
 ねんきやのせりしとありのりり

梨の花

おしけらり朝日とありのりり  
 暖多や梨の花切るとありのりり  
 白濁す水の清さとありのりり  
 意配りしとありのりり

海棠

海棠の花とありのりり  
 海棠花からきけとありのりり

長翠  
 巢北  
 碩布  
 白雄  
 春陽  
 保吉  
 碩布  
 春陽  
 碩布



海棠やほろは傍ふちと咲く

碩布

辛夷

楊柳や辛夷のふきり南  
水鳥のまゝと冬く好く辛夷は  
極木厚の掛居るものありけ

白雄  
みら彦  
碩布

挿木

男い出く挿木の五葉法印うぬ  
昔と安んずるし人のさく木は  
年々やうなれりさくさく柳  
この葉とさく性なほ挿木は  
木や竹や手高うはるるいさ

白雄  
春満  
葛三  
みら彦  
長翠

梅樹の性熱もあさきく木葉

碩布

梅穂

庭中のまは海法はあか  
石あくはつきかやうく松孔露  
いづれけの梅とつきあや  
二口と梅り及びゆき  
清令の者あつきのあ

公雄  
保吉  
毛翠  
真昭  
碩布

馬酔木

濱の墓と縁らさるる酔木咲  
あつかりんとき着那のあ  
田の柳りふり酔木の咲く

みら彦  
春満  
碩布



木の芽

けしき多つ岩の木は芽の器りか  
 誰人ふ老をわし木の芽つむ  
 切株の種十倍ふ芽りりり利  
 分々いりりり居る木のめりり

白雄  
 梨箱  
 葛三  
 碩布

躑躅

水はくふりしちの丘や清りり  
 木啄もたふすりりる若るつりり  
 局口紫つりりりりりりりり  
 老る温家を事ともさるつりり

白雄  
 みちる  
 保吉  
 碩布

若菜

大空の旦りのちを常いりり利  
 里人に改りつむるるこの都  
 櫛巻柄きもりふいさるる  
 口かぬ野りりりりりりりり  
 山田とふ思い案をらつりりり  
 若るるとも結ふ解りりりり

保吉  
 保吉  
 春橋  
 葛三  
 碩布

芥

柳きか芥もを清りりりりり  
 芥つこの樹も多きりりりりり  
 芥は此若後りりりりりり  
 芥り合とわたりりりりりり

保吉  
 みちる  
 葛三  
 碩布



蘇

蘇黄の紺の鉤場を抄へえり  
のまをまをむを怪付蘇可種  
唐の庭蘇一色と来より程

白雄  
葛云  
頑布

土

碑とまよつてえんおきと土  
存ころろの昔をこゝろはく  
我唐北白鳥よきん法ん

白雄  
葛云  
頑布

若

甲の啼籠る久は下州若  
若州や山風興ふ恒乃内

白雄  
葛云

わらうもぬるまよふ山北而  
真の州

頑布

何れよ子の鏡の鳴き  
雲隙の初梅も嬌し春の香  
唐とて是端のふりも春の香  
我唐り礼りかやもをれを

白雄  
葛云  
頑布

莖

中しよき衣恥辱れす  
莖那の合点終りて探さる  
我唐ハ舞子のねれ下す  
道分や莖をちるるはり建

白雄  
春情  
白雄  
保吉



波りしを 晴きとちいし 蓬外  
 ハ重物やわきとたきしは 蓬  
 波はも 波い何まうし 蓬州  
 市女 笠置 石坂 雲 長く 川  
 与き 舟のハ 殖 ぬとく とも 色 州  
 梨 庄  
 菓 北  
 碩 布

蒲公英

多ん ち 年 東 道 北 〇 如 卦  
 蒲公 英 や 遊 う 上 の 里 の 東  
 たん 柳 や 若 桃 灯 の 下 久 々  
 蒲公 英 の 何 ぞ ち 何 じ 久 々 柳 苑  
 春 晴  
 碩 布

橋州

お 宿 家 の 留 り 大 根 ふ と ち ち 年  
 ち ち ち ち ち 橋 州  
 ち ち ち ち ち 橋 州  
 碩 布

蓬の基

麻 子 の 蓬 ふ ち ち ち 蓬 外 〇  
 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕  
 蓬 外 〇 蓬 外 〇 蓬 外 〇 蓬 外 〇  
 碩 布

獨活

宵 の 事 独 活 〇 独 活 〇 独 活 〇  
 風 呂 友 の 中 〇 折 〇 芽 〇 〇 〇  
 龍 の 舌 獨 活 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
 葛 〇  
 菓 北  
 碩 布



蕨

此の山に竹の葉の上の折  
山古の末とて多くといふ蕨の南  
まつらひや如く出た二云々  
實をむきぬとて先とては如

州摘

摘州子老も若も蟹歩り  
つゝ否や暖簾の肉の一を多式  
法州之廣野も有る松のりけ

杉菜

口を食も杉菜のふかぬ杉菜は  
春湯

二園の石居とせし杉菜可南  
菊よりや杉菜はきくても有し  
相苗ふりけりて有る杉菜のりけ

蕨

鬼阿さみありて名は春に州  
世の丈陸木の所をゆいゆいと  
肥より横道をける蕨のりけ  
深形ふりてはし鬼阿さみ

州麦

州麦や一とれは是より雨をりけ  
春湯  
保吉



春菜の我思ひの池の松

菜の花

花は此の白ひい甘く母かきこり  
の巡り只る此花の西ひこりし  
菜のせや湯の造り山をくし  
りれちや湯くくく富土の山  
菜のせや湯後保る譽らあり

碩布

白旗

春湯

梨菜

菓北

碩布

種菜

一日向尚くも芽を植るこり那  
芽種守耕法はいふ掛くんら  
穴を出る物のこりや芽種

春湯

葛之

碩布

種却

はるくくと啼名まを種却りし  
一里の一日ありは種却りし  
種却るも我物種とみ居る

春湯

菓北

碩布

苗代

はるまきもや苗代の存み居る  
春の雪苗代水の何れをよ  
苗代の根水多親孔手の  
恒内ふ苗代一多本有る

春雄

保吉

みる表

碩布

菜植

菜の苗菜は志くも守種なり

春湯



葉二本極もいそぐ末のころ  
菊枝より比よりあそひをええり  
碩布

山吹

山吹やあまのけしきのころ車  
雨の色いそ山吹の濃さより  
舟曲り山吹あそふ葉一か  
山吹や海小舟なる隠きやと  
山吹きや振舞先の照る余り  
山吹の清き水のも巻りころ  
山吹の中く花は免下南  
木此  
如旗  
保吉  
春悠  
みち丸  
葛三  
葉三  
碩布

増長の石二もあつた中木此の  
あつてもさきあつた本此やその中  
口此うけや古井本此の咲みし  
古きやいそうけり本此をころ  
雨あつた上品なるわけり  
碩布

草花

多き窓の温な處のほそな風をた  
魚投り草花月夜に咲きし如  
花葉切原のほ枝の赤なる  
芦の角  
春悠  
長翠  
碩布  
みち丸  
みち丸















多此為風ありありなる  
 多の葉の阿しりき申る  
 州一り多男庭は葉多啼  
 以並本一刺く日葉多啼

白雄  
 保言  
 石二  
 碩布

歸雁

阿しりき多啼  
 葉此下多しりき多啼  
 阿啼を奥の庭に阿しり  
 多しりき多啼

白雄  
 葛二  
 石二  
 碩布

雪下入る

多しりき多啼  
 阿しりき多啼

白雄

雪下入る多啼  
 多しりき多啼  
 一葉下入る多啼  
 多しりき多啼

春吟  
 石二  
 葛二  
 碩布

乙女

葉乙女多啼  
 新乙女多啼  
 葉乙女多啼  
 乙女多啼

白雄  
 保吉  
 石二  
 碩布

蝶

蝶多啼  
 白雄







此啼く高きを或女の古もきか  
圃板のつきおしつて枕あうらふ  
長巻 破布

蟻

はきこころを月の表をこけりあこの  
何の子やむきよまきくたうとれる  
白雄 破布

蟹

古き代のみまのえ紙やれこ一のいふ  
我蟹好もむらぬあさうのむ  
保吉 破布

田螺

おむつやもるるぬ田螺を啼とつふ  
あけ田うきくは垣板をうら  
白雄 破布

蛤

まぬらうをワケをくくおさたり  
はきこころや欠ゆきすま道の中  
白雄 破布

蛸

土舟や蛸をけり水乃  
榛の木此おるまきやを悦汁  
白雄 破布



ワキ〜〜〜子種多〜の規計 破布

馬刀

馬刀半の表れき五分のちり〜 公雄

〜〜〜に種病多〜エま〜 葛二

〜〜〜のま〜志り〜なま〜業〜 破布

白魚

〜〜〜や表〜白魚貝〜菜 白雄

白魚の身〜多〜四儀〜 みるゑ

表〜魚〜魚〜白〜のち〜 葛三

白魚の藻〜帽子〜わ〜り〜 破布

鮎吸

鮎吸のさ〜れ〜折〜多〜小〜鮎〜ら〜み 春鮎

鮎吸と石〜わ〜く〜人〜鮎〜子〜一〜那 破布

猫患

猫患の身〜を〜と〜猫〜の〜品〜は〜一〜の〜年 保吉

け〜は〜に〜形〜も〜洗〜い〜す〜男〜、〜襦〜 古 みるゑ

猫の患〜子〜里〜回〜風〜お〜速〜な〜 破布

麻の落角

麻の落角 拾い〜〜麻〜は〜落〜一〜角 白雄

何方〜向〜々〜落〜古〜麻〜 角 保吉

今〜落〜と〜角〜を〜嗅〜り〜 女〜麻〜の〜名 みるゑ

六〜時〜に〜何〜年〜 毛〜も〜川〜や〜麻〜の〜角 破布



降物風神

残雪

残雪車ふるゆるみやまの那  
消るり此何は神えも残る雪  
残る雪山の遠さる多のもき

保吉  
葛之  
碩布

雪回

来ひまの回毎の雪回  
我座を雪ふるも  
墨もも雪ふるも濃雪ふるも

白雄  
兼光  
碩布

春の雪

何とあるか安房の岬の春に雪  
春の雪家鴨のうらなは舞ふる  
春の雪鴨のうらなは舞ふる  
桃華と見ふるあり春の雪  
次ふも雪の降あり柳の舟

白雄  
春の  
葛之  
保吉  
碩布

淡雪

淡雪のりそりのうらなは舞ふる  
河のゆきの雪ふる柳の舟

七  
碩布

雪解

雪のりそりのうらなは舞ふる  
雪のりそりのうらなは舞ふる

保吉  
兼光  
碩布



雪をけしを足もつて庭や垣の旭  
石も如藤の芽け下け  
鶯の葉のやうに記す雪解の如  
立時... 春用 庭根... 雪をけけ  
保吉  
葉也  
破布

春雨

春雨の才... 昨旭の... 雨の...  
庭... 雨... 此...  
は... 雨の... 雨...  
旭... 雨... 雨...  
春... 雨... 雨...  
保吉  
春...  
高之

春... 馬... 山  
梨...  
破布

別霜

別霜... 霜... 霜...  
白...  
霜...  
破布

春風

春風... 春... 春...  
白...  
保吉  
春...  
春...







能月

淋しきや能月の木の栂の木  
 立木の雲をよきとれ能月  
 瑞々家の陰もさし出ぬおぼろ月  
 物々しきもちるしは影の月  
 碩布

夜

ふり添え雲をさうさうしおれ  
 雲かまむとやとるにせまられ  
 月おのねりし雲の影はけ  
 老のふれはくはひの自もる雲  
 雲来くけりふはなる山はの影  
 白旗  
 保吉  
 碩布  
 春三  
 碩布

春の癖思ひやえいゝ雲を利  
 雲あやや佛の明く進とちる  
 深飯に推舞るきふううう  
 只中よ扇掛角しと門雲  
 梨翁  
 榮兆  
 春修  
 碩布

陽矣

かけぬふや新ちるり此な尾  
 ころろろろれりえり利休の書跡か  
 かけろろろや生飯はははる花も  
 陽矣のよえ安きとそりやうらな  
 かけろろろや吹矢のかきし  
 陽矣や紫赤れさるる家  
 白旗  
 保吉  
 春三  
 梨翁  
 春修  
 碩布



糸遊

糸遊子 兎の隣きやうしー さと 白雄  
 糸遊の田中より多き小 家 此 保吉  
 糸遊の田中より多き小 家 此 保吉  
 糸遊の田中より多き小 家 此 保吉

神釋

初年

初年や 親の名をつま 野 龍 治 保吉  
 初年や 親の名をつま 野 龍 治 保吉  
 初年や 親の名をつま 野 龍 治 保吉

初年や 親の名をつま 野 龍 治 保吉

海岸

妙き 連う 梵 瑞も 法うん の 阿 申 白雄  
 妙き 連う 梵 瑞も 法うん の 阿 申 白雄  
 妙き 連う 梵 瑞も 法うん の 阿 申 白雄

涅槃

糸遊の法も 佛も 別と 可 那 白雄  
 糸遊の法も 佛も 別と 可 那 白雄  
 糸遊の法も 佛も 別と 可 那 白雄



今此世の世をくし年なり涅槃像  
涅槃像をいつれ世の指し  
為三  
破布

岸入

岸入や只く不深きうし  
峰のそくさわる里此小供也  
白旗  
破布

梅若糸

打候人のこを梅若糸のうら  
猫抱く梅若糸の通る  
糸北  
破布  
梅若糸の連はと先きの物なり

乾坤

初子日

舟岬の松子此のせと  
子引いもくしや此のうら  
春徳  
保吉  
義里を松ふるし初子此の  
春徳  
破布

人日

人日の子生れし人とはのゆ  
初子此のうら  
春徳  
破布  
人のこのうらをふる日此のうら

七経







作保娘の生遊心の山語の形  
子音に神作保娘の志をいふ

春三  
碩布

山笑

そのやうに旅路をすまふ山笑  
新戸出や多し事をいふ山笑  
ふ雪に多えおしや山笑

春三  
碩布

出代

出代の法とくまをまゝ海にうつり  
出代に立ちうけ隠す月くらけ  
出代をうつれり春のやまをうつり

春三  
碩布

蕨入

蕨ふりや枕の小巻の白りあふ  
蕨入に姉妹のねをまひるる  
やぬのを送りけり春のうつめ栗

白雄  
春三  
碩布

総夜

総夜や誰うの海より麻崎舟  
おぼろのねを春砂のうら小舟をうつり  
総夜やあきとくたふ思ひのあけ

白雄  
春三  
碩布

春の夜

春の夜やまきの舟をうつりあふ  
春の夜やあけの舟をうつりあふ  
春の夜やあけの舟をうつりあふ

春三  
碩布







門先や深切らるる水思ふも 葛三  
船流れは去るる事あり水宿る處 碩布

春水

春水清きく小舟をさるる申すはたし 小の春  
舟を白く櫂らゆらゆら春水思ふ 保吉  
そよの水はゆらゆらけり春水 長翠  
浩然の春水をさるる春水の水 碩布

春海

是も春の波明に去るる自春 此海 葛三  
春の海をさるる春の海 菜也  
春の海をさるる春の海 碩布

春の山

春の山は春の山と云ふは 葛三  
一木一草も春の山に 菜也  
山は春の山と云ふは 碩布

春野

春の野は春の野と云ふは 白雄  
春の野は春の野と云ふは 小の春  
春の野は春の野と云ふは 長翠  
春の野は春の野と云ふは 碩布

春野

春の野は春の野と云ふは 白雄



香山の子神有けり 焼すくろ 葛三  
此は多し 雨を降る 焼野か 長年  
焼野の只四五日の名なりきり 碩布

初神鳴

足柄をまきく 物多神の集り 朧  
何をもく 初神鳴のまゝなり 碩布

正月

正月ハ坊の足袋は八月おかし 常衣  
正月の木のまきく 明安か 葛三  
正月やまきるも ちんす 梨箱  
正月はまきるも ちんす 碩布

二月

焼ちんすはや 水月北基所 白雄  
水月や田舎のまきく 小酒巻 ちんす  
水月のまきく ちんす 二月の南 碩布

弥生

踏巻北基のまきく 弥生外 葛三  
家内を海 弥生半 可那 春物  
久く 東海色の 弥生 碩布

上巳

桃のりや馬より 老を祀おろす 葛三  
をく のりや 出く 笑のり ちんす 小本 ちんす



枕の口を賣さうなるもの龜おみ

頑布

曲水

曲水の邊よりわらわの池ありて

白雄

曲水の邊よりわらわの池ありて

頑布

離

旅人の宿よりわらわの池ありて

白雄

旅人の宿よりわらわの池ありて

頑布

旅人の宿よりわらわの池ありて

頑布

旅人の宿よりわらわの池ありて

頑布

州餅

州餅の味よりわらわの池ありて

頑布

角の口を賣さうなるもの龜おみ

長鼻  
頑布

海苔

生海苔の味よりわらわの池ありて

保吉

深切の口を賣さうなるもの龜おみ

着三

万代の口を賣さうなるもの龜おみ

頑布

汐干

夫干の味よりわらわの池ありて

白雄

火を焚く面よりわらわの池ありて

着三

此の口を賣さうなるもの龜おみ

頑布

炉塞



炉塞をぬき物し一層子持りぬ  
炉をぬきし物をお戸の明を消し

炉塞

空名は大火をぬきし物し  
空名は大火をぬきし物し

畑打

根係り厚く畑打をぬきし物し  
畑打をぬきし物し

田打

新米の四月に此田打をぬきし物し  
田をぬきし物し

春の巻

世に油誰かし物し一放田  
世に油誰かし物し一放田

行春

り春の巻の物し一放田  
り春の巻の物し一放田

白雄

白雄

白雄

白雄

白雄

白雄

白雄

白雄

白雄

白雄

白雄

白雄



けりたしむるをいふたふ春一香  
 由久はるのちあまのちき干酒  
 いまやたのちのゆきしら式  
 由久を申す庭のちあまの  
 春三  
 梨三  
 碩布

春部供

俳諧数人六百題 夏之部

生類

時鳥

起所の九枚すちあまのちき干酒  
 子親啼や連あまのちき干酒  
 春三  
 梨三  
 碩布

夏之部







岩の戸や高も真忍木子啼水鈴  
宵月の風元重や啼くお那  
痛うらまの巻くありたるふあな  
多りや花とらしくは啼水鈴  
落仲の戸を多く守るおな  
誰をぬも志とふ宵うや啼水鈴  
啼水鈴中らりし神の使はる事

薩割考

一志さう竹小柳はさやう  
くくさうや等州留も夜は吹寸  
苗葉ふもも志さうやりく子

みち丸 春 修 芳 翠 梨 花 葉 花 暮 三 碩 布

白 雄 保 吉 くら 丸

きしきう北啼はさやう 枕う南  
測とちりぬやなる果や割 華  
志らうらる土地を 求へりく子

豊 翠

川勢を北筑波おししは吹あや  
かきそみの嘴ありとる 横らう那  
河勢をや尻のころさな 惜けなき

粉

う北嘴は奥をあや 多ぬ 葉  
梅も粉の面をなうく 篝の光  
籠の粉はさうをくく 暮籠り

當 三 梨 花 碩 布

白 雄 春 修 碩 布

白 雄 保 吉 春 修



終し物も何し舞に未だ一の年 長髪

暁の焚火をすゑる物匠の部 蓄三

物も色物か物も色物も色物 碩布

致喰方

物喰方速くもくもく喰くもく 白権

致喰方物をおもくもく喰く 蓄三

たのしみは有るものなり 碩布

幅幅

幅幅の比夕を物置の物置 白権

幅幅の門は浅き比の夕も衣 保吉

とらふもや物置の物置もい 春修

物置の物置と物置の月夜 蓄三

物置の物置と物置の月夜 集配

物置の物置と物置の月夜 碩布

鳴浮集

夜眼を物置の物置を物置 保吉

物置の物置と物置の物置 みる表

物置の物置と物置の物置 碩布

通物

一羽二羽三羽を物置 物 白権

何事を出る物置 蓄三

とらふ風の毎に吹物置 碩布



時鷹

鶴に形ありて多し多し樹造  
鶴の此樹河川に在る奥にあり

白権  
頑布

羽板名

ワタシ系子思ひくくは羽板けり  
家此男よ小舟を遊ばせ給けり  
おあしを御中伏を羽板けり  
吉事と云ふは好神を州好板名

若三  
春河  
菜肥  
頑布

襪

襪造り熟草河子  
山伏の心し強造り門の走

菜肥  
春河

野此より牛造のけりさきさき  
細糸のまきえすすの人の形

梨箱  
頑布

墨

舟極の墨まけるき少造り部  
舟此中却りのみの多き茶  
墨のり未あらんるるるる

若三  
去河  
頑布

蚊

竹切り蚊の形まき夕下  
さし入やんをさす  
杉風を念しう居る啼板が  
出とらん板をさす居る啼板が

白権  
保吉  
若三  
去河



柳北好の人侍く啼く夕了う水  
 春柳  
 暮の好北多し啼き戸口灯  
 暮  
 芒う好のうら病のやうり程  
 暮  
 原家耳 柳北好のやうり  
 碩布

蚊

蚊  
 蚊居り火の燈りの来る啼け外  
 白雄  
 蚊居り火の燈りの来る啼け外  
 保吉  
 蝙蝠を燈り知る蚊を居る  
 碩布

蟻

蟻  
 夏に好を好する事うやうやう  
 白雄  
 うの好のきやうむむうり  
 碩布

蟻  
 蟻を好する事うやうやう  
 白雄  
 蟻の好のきやうむむうり  
 保吉  
 蟻の尻を好する事うやうやう  
 碩布

蟬

蟬  
 柳北好の今も好する事うやうやう  
 白雄  
 蟬の好のきやうむむうり  
 暮  
 蟬の啼き出すと好のきやうむむうり  
 碩布  
 枯竹の好のきやうむむうり  
 暮  
 好のきやうむむうり  
 碩布



幼鰓やし竹をあらうくやじ

根布

夏の魚

油出の鰓よりひきとる家のむし

白雄

出多むし〜時をさるおとらひむし

香上

竹海もあらうくやじのむし

根布

蛇牛

酒き海を根際のもろむしつむし

春鰓

か〜つむしやのやうな時青なる

香上

紀の雲も越いやもあらう

第肥

とら鼻のきん根をあらう

根布

枝蛙

風浪は本をあらう〜枝かきり

根吉

言ひあやまみあらう竹枝うけり

春鰓

とら鼻〜根をあらう〜枝蛙

根布

蛙鰓

伊〜あらう〜根をあらう〜根吉

みち吉

子子も根をあらう〜守丘あらう

第肥

お〜ゆりの〜川もみをあらう

根布

鰓

鰓控〜家此をあらう〜根の〜ち

みち吉

岩もなるを〜あらう〜鰓をえり

根吉

州州の〜河ゆらもあらう〜根吉

根吉



蕨の結市ツシは昔多あり

破布

川橋

河のうや船の穂さする白雄  
水けのやうに昔由之若川は  
川うまや余舟くぬる二人連

白雄  
春橋  
破布

麻の子

州のまをさす麻此子の親毒  
家出久あきす糸一帯の子ら  
飛麻の川速くぬる何部  
望き紙きさくひは世の麻の子は

白雄  
葛之  
紫北  
破布

麻の袋角

町のせれまふや麻の袋角  
秋麻のち老阿のりれ袋角

若翠  
破布

火車

もえやの火車麻の血一白  
火車まを風うま松のけり  
方の麻の智しらす火車うま  
くわくとまを火車の空の

白雄  
保吉  
葛之  
破布

照射

望みしすの時多あむ岸の雲  
境に雲のあけけけり山  
望の眼よりえたる雲

保吉  
紫北  
破布



植物

若葉

世と若葉をいひのりありあり  
 徳を此邊に定めんりてこの水  
 蟹焼くをいひていふ新葉を  
 御人の家物ともいふ可なり  
 おもひの松を植へていふ時  
 ちきおとに佃の若葉をいひて  
 傘のちきおとをいひていふ  
 新葉をいひていふ家斗り

白雄  
 借吉  
 春徳  
 みるる  
 若葉  
 長巻  
 葉北  
 破布

若葉

西のやうに淡い葉胡に葉をいひ  
 七曜の若葉をいひていふ  
 若葉もいひていふ葉をいひて  
 若葉をいひていふ葉をいひて  
 相板の若葉をいひていふ

若葉

木下書

白雄  
 春徳  
 みるる  
 若葉  
 葉北  
 破布



下等や推の系より子州もたうん  
 とき始抄く信りり木下やん  
 何等の様子の物ふ木下やと  
 等の情も驚々有ちり木下等  
 中書や御つりの如きれやうと  
 白雄  
 春信  
 みる表  
 策肥  
 碩布

夏木立

可申に取れり深し信りり木下  
 外と如くふき信りり木下多り  
 所仕達の信りり信りり木下  
 信りり通急りり出取寸取木立  
 白雄  
 番三  
 策肥  
 碩布

系梅

系梅子抄りも信りり木下やと  
 信りり信りり信りり信りり  
 系梅子感りり信りり信りり  
 白雄  
 みる表  
 碩布

若楓

若楓信りり信りり信りり信りり  
 信りり信りり信りり信りり  
 信りり信りり信りり信りり  
 碩布  
 みる表  
 番三  
 梨子  
 碩布

卯の茶

うのむゆ抄りりの後の裏おも  
 白雄



卯のむす言ふに極楽のつら  
う此をを斬らうとさきたる嵐外  
卯のむすきし木むすのむすうう  
常磐木落葉系  
碓氷

常磐木の落葉をむすあつこのをり  
あつくとなふる庵守捕まぬ  
時代をく相常磐木の落葉を  
碓氷

橘  
老え人を橋へ 碓氷  
あつと常磐木の落葉を  
あつとつゆりうの  
碓氷

むす一足引いふふ 碓氷

相茶

思ひ物此子の井く多く相のむ  
鬼銅家もあふのれ相此を  
あちの相五七五三のむす  
碓氷

むす水うむすむ此着の南  
隣ううと味強味もむす  
むすむすううむすむす  
碓氷

栗の花

未河とあふ家戸や栗此む  
ふらる







多代の松石用なる多なり 粉のし  
粉の葉はおさたる式夕ア 形を  
とや古くよりきとのんより 粉のし  
表 堀  
葛三  
碩布

橋の突

おむらうの橋のすまのにをくらうの突  
突を揚ぐ口押けをう 山をくら  
橋に突くおれおの大事なり  
表 堀  
葛三  
碩布

牡丹

粉きりや牡丹のそ花物い  
雅子の世道は出く 粉牡丹  
源音くく牡丹盛人きえり  
表 堀  
葛三  
碩布

お水の雲を揚ぐ多門 けあまうな  
おを先くくく算く牡丹表  
表 堀  
碩布

粟栗

お芥子は強く 粉を 産の那  
産を造粉はけく 夕ア表  
粉をれ白いのすをけく のを  
思ひより古より 夕ア芥子の系  
芥子ちりく 布金の地もやん  
表 堀  
碩布

杜若

雨の布を産を多し 杜若表  
杜若の以は産 粉くくろくす 産を  
表 堀  
白雄  
保吉



水子出れり清くき白如し新雪の  
 有梅のそよ人可花如きくもた  
 世を空の道の里りの一松杜の  
 生台古々思ふも嘆し如きつる  
 路やまらや一枝折しうたつはく

春  
 雪  
 三  
 葉  
 花  
 破  
 布

蘭

蘭花田植了年事とる海をぬき  
 庭軒にさき下しほそ方蘭草

葉  
 花  
 破  
 布

春の秋

春秋の情をく老くはくしき  
 中多ふすくや山家の春秋林

葛  
 三  
 葉  
 花

秋の女の子帯一物多し春秋林 破布

春州

刈出ゆへのおられ揚きく山家  
 江戸まも春秋杜風吹まり刈  
 春州小芽田楽の地まゝの歌  
 春州の漁をくたふ山家く南

長  
 葉  
 春  
 花  
 破  
 布

藤花

ものも守水邊をくく風をり久  
 藤花藤もほたり手長海老  
 五三の秋をくりく手藤花舟

白  
 雄  
 手  
 長  
 海  
 老  
 破  
 布

藤花



うねるの同く嵐に浮根 茨  
白雄  
陰科のまゝの思ひをなするなり  
葉水  
うき草やうらむいふも下も(か)

百合

山百合や嵩染花(写す)一川咲  
白雄  
まゝ百合の葉根も供家うね  
みぢ葉  
まゝやれは百合うねる申も花む  
破布

葵

子を思ふ親のまゝの葵 立葵  
保吉  
燈籠の明も咲あま葵うね  
春鳩  
かき籠の解あふいふも(か) 破布  
葉水

五六本多しと馬子あふいの事  
破布

芍薬

芍薬や四十の根は切法久寸  
白雄  
芍薬也 露に<sup>ヒ</sup>露をたう前(か) 家  
みぢ葉  
芍薬の根を<sup>ヒ</sup>出<sup>ヒ</sup>の候の所  
春鳩  
芍薬や露を<sup>ヒ</sup>れさうな咲所  
破布

土簪

而もれ<sup>ヒ</sup>の山家土簪咲るし刺  
着三  
下河しやむ北咲るし(か) 河了  
長翠  
出筋の押撫されるし(か) の形  
破布

初菫子



たの菊子 湯島の笑 秋のふりり 春 湯

紫のくも 名もなきも 嬉し 初 菊子 梨 翁

茅のくも 一本のくも こんこん 菊子 紫 北

芦火 葵 家いす けいれと 初 菊子 秋 布

大角豆

里 孔子のまよ 引のくも さく けいれ 紫 北

あう 盾の 権のまよ 紫さく けいれ 秋 布

瓜

夢あうら 初くも さく 初 紫 葉 白 推

あけい 命し 菊も さく 初くも 紫 葉 みる 美

あうら せり 菊さく 初くも 紫の 法 春 湯

あけい つけく 瓜の 玉 西 北 菊さく 初 布

著 裁

菊尾 咲や 菊さく 菊さく 菊さく 菊さく みる 美

菊さく 菊の 菊尾 一時 咲に みる 紫 北

咲し 連人 北さく 菊さく 菊さく 菊さく 初 布

葵

小く 菊さく 菊さく 菊さく 菊さく 菊さく みる 美

雷 咲く 菊さく 菊さく 菊さく 菊さく 菊さく 紫 北

菊さく 菊さく 菊さく 菊さく 菊さく 菊さく 初 布

萱 州

菊さく 菊さく 菊さく 菊さく 菊さく 菊さく 菊さく 梨 翁







志のふ州志の付る中も 竹の子を  
何ぞの心く 美人の 蕙の心  
物慈情あふす此自の心  
碩布

苔の花

苔のむの 美人の 美人  
竹の子の 美人の 美人  
解物と思ふ 美人の 美人  
碩布

美人州

美人の 美人の 美人  
美人の 美人の 美人  
美人の 美人の 美人  
碩布

竹の子

竹の子は 竹の子の 竹の子  
竹の子の 竹の子の 竹の子  
竹の子の 竹の子の 竹の子  
碩布

若竹

若竹の 若竹の 若竹の  
若竹の 若竹の 若竹の  
若竹の 若竹の 若竹の  
碩布



竹植

らき所を去然の掘と竹植  
竹植は腰鼻輝掛高と男い  
竹の島や筆打口出直

あやめ

あしと就子掛うあやめ  
朝あやめを物一これい  
男い出うあやめを  
いられぬと古い  
いそあやめ人いあやめ

早苗

早苗の田中此度うま  
早苗と鎌倉男  
早苗のねえい  
四五 膝此苗何  
田植

田植此酒の  
あのを物田  
いれ  
男い  
いれ  
早乙女







遊生也 梅子を軒より採し  
みち彦

たゞしーのりや 野も 藤より  
葛三

撰よよ志の ありき 藤より  
破布

屋類

而此りや 暮りけの 藤より  
保吉

暮りけの 暮りけの 暮りけ  
みち彦

暮りけの 暮りけの 暮りけ  
春水

暮りけの 暮りけの 暮りけ  
破布

夕類

夕の 夕の 夕の 夕の  
白雄

甲より 本より 夕の 夕の  
保吉

夕類 此類の 柄柄  
春水

遊ふり 夕の 夕の 夕の  
長翠

夕の 夕の 夕の 夕の  
破布

蓮の浮葉

夕の 夕の 夕の 夕の  
みち彦

夕の 夕の 夕の 夕の  
紫花

夕の 夕の 夕の 夕の  
破布

蓮花

夕の 夕の 夕の 夕の  
白雄

夕の 夕の 夕の 夕の  
みち彦

夕の 夕の 夕の 夕の  
紫花











遊中より山を隔てて竹あり 破布

青嵐

山の香々天暮松の青ありし  
青嵐離れ只青ありし  
三年四季の吹く南風の青嵐  
赤く出くま生あるは青ありし  
青嵐吹守 青ありし 十文字 破布

風薫

風うそを度し度し  
風薫るもこれ松 捨るも  
九月母の香を薫るや風うそ  
白檀 保吉 破布

十二十三

日暮や照るもあらず天際り  
風うそを度し度し  
松の香を薫るや風うそ  
破布

扇子

解落ふは扇子 扇子 破布  
扇子 破布

春情

春情 破布  
春情 破布











表流舟大なる梅花をうへりて 破布

心太

鏡一川をなを付しきやの右  
侍り介しきるをなを心太  
經るを誠なるをなを心太  
破布

水室

紫の黄多る中 水室  
りふふとる 水室  
内磯子 梅葉 水室  
破布

葛

葛のやまの宿 水室  
葛のやまの宿 水室  
葛のやまの宿 水室  
破布

沖崎

沖崎の舟相を沖崎  
沖崎の舟相を沖崎  
沖崎の舟相を沖崎  
破布

神釋

灌佛

聖此乃佛の水のり 佛生舎 白旗



ふき入の心くさくさ佛生房  
ふらんふのや新に運し夢此  
山深るに叶はしりく佛生舎  
うきまのりきまひきと仙生舎

花法堂

棟上の波聴ききし書法堂  
寢る虚に打ち流りく花法堂  
花法堂をききたし押さるる存

夏籠

夏籠の心くさくさ一衣如解  
花法堂の心くさくさ一衣如解  
花法堂の心くさくさ一衣如解

花法堂の心くさくさ一衣如解  
花法堂の心くさくさ一衣如解

花橋

花橋の心くさくさ一衣如解  
花橋の心くさくさ一衣如解  
花橋の心くさくさ一衣如解

葵

葵の心くさくさ一衣如解  
葵の心くさくさ一衣如解  
葵の心くさくさ一衣如解

競馬

競馬の心くさくさ一衣如解  
競馬の心くさくさ一衣如解  
競馬の心くさくさ一衣如解

保吉 白雄

保吉 破布

白雄 春籠 破布

破布

白雄 破布

破布 春籠

破布 春籠 保吉



嘯の保をく 玉の所へ 言 破布

不二詣

皇初の相越一り富士みか休 春  
舟の所へ 何をささるるに 不二詣 破布

怪

柳の所へ 何をささるるに 不二詣 白  
表具屋の所へ 何をささるるに 不二詣 白  
延喜の所へ 何をささるるに 不二詣 白

雨乞

雨乞の所へ 何をささるるに 不二詣 白  
雨乞の所へ 何をささるるに 不二詣 白  
雨乞の所へ 何をささるるに 不二詣 白

雨乞の所へ 何をささるるに 不二詣 破布

雨板

雨板の所へ 何をささるるに 不二詣 白  
雨板の所へ 何をささるるに 不二詣 白  
雨板の所へ 何をささるるに 不二詣 白

雨板の所へ 何をささるるに 不二詣 保吉

雨板の所へ 何をささるるに 不二詣 白

雨板の所へ 何をささるるに 不二詣 破布

節折

節折の所へ 何をささるるに 不二詣 破布  
節折の所へ 何をささるるに 不二詣 破布  
節折の所へ 何をささるるに 不二詣 破布



乾坤

青藤

青くたると龍年の巻のうらみ  
青くたると龍年の巻のうらみ  
龍年の巻のうらみ  
龍年の巻のうらみ

白  
白  
白  
白

短夜

くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく

白  
春  
春  
春

短夜  
短夜  
短夜  
短夜

白  
春  
春  
春

夏夜

夏夜  
夏夜  
夏夜  
夏夜

白  
春  
春  
春

夏山

夏山  
夏山  
夏山  
夏山

白  
春  
春  
春

夏野

夏野  
夏野  
夏野  
夏野

白  
春  
春  
春



有士ノ輩ニシテ相シテ存シテ事  
既事ノ如クもなす、有ルル  
葛ニ  
破布

夏の月

不切ニ其ハ格ナリクニ夏の月  
初ニ入ノ所ナクシテ於夏月  
白  
保吉  
葛ニ  
破布

端午

馬ノ子此ナリトシテ  
相シテシテ端午ノ終者トシテ  
葛ニ  
破布

穢

海氏路々武老の子ナリハ其ノ物  
為ルル也残満有ルル所ノ海を  
春  
破布

印地打

君ノ代々印地打有ルル也先打  
川原風印地打有ルル也先打  
春  
破布

葉玉

葉玉残有ルル也先打  
葉玉ノ不似ハ也先打也先打  
破布



龍の角の骨の傑も船底の柱に  
悟易、好らるも如也の玉取  
老よりを伸す是のうや可好  
たふ多計に快くても好むの月  
物や方れ好らるるに

紙帳

深切を角の骨の骨性事那  
古久為本と好む情し紙性事  
智より此方好らる紙帳の好

五月書

白雄  
保吉  
春泐  
蓄三  
破布

蓄三  
築北  
破布

小灯の蟹の造り五月や  
おもくらや洲山下五月書  
火を舞ひて五月書

五月書

厚竹又集の甲斐あり五月  
人遠く五月書  
大和の五月書

卯月

梅櫻の雨はほれぬ卯月  
古きと此卯月の好む五月書  
卯の月

保吉  
築北  
破布

蓄三  
共  
破布



五月

綿毛菟の遠平 花 五月 白 権

猪子門ちりしれ 五月 白 権

雨乞をす年もある 五月 白 権

六月

六月の深層の緑青先 白 権

六月や十のくさき 一 白 権

六月の梅葉の延平 白 権

六月の柳の折 白 権

清水

何れと一木 白 権

秘人の掃除 白 権  
あつたはれしとある 白 権  
深切に清く 白 権  
清くはる 白 権

雲の峰

雲の峰 白 権  
雲の峰 白 権  
雲の峰 白 権  
雲の峰 白 権

神崎陳

神崎陳 白 権



神崎の陳相ふりく土佐の業 破布

尋

り此方のう紀を暑き落りこり此 白雄

阿のきりき飛二年新鶴野那 保吉

暑きりや暑きり一板のきか紙 乙吉

判阿のし佛のうけをふりこり 長琴

分入る阿のきりあれと小倉山 葛三

此阿のきり一寸先此のきりあれ 破布

涼

橋本へのり阿のきり阿のきり 白雄

すしきり大工阿のきり阿のきり 保吉

高橋のり又の涼一さりきり 長琴

若き此酒是ふたりすきり阿の 葛三

今のはきりあれと一涼 破布

鼻

り水打打まふかを白 白雄

乙姫此麻もふりしきり阿の 乙吉

鼻鯉のゆきをぬり阿の 葛三

若月や輝の最たる阿の 梨三

吾ふ息うやあけりしきり阿の 破布

鼻

枕の房きり鼻をけり付き 乙吉



玉鐸のふいり年も通るし  
松之付ふ入りの年のもろり  
原水  
破布

夏履

玄夜を始合市村 信才同土  
天履の信合市村の信才同土  
長翠  
破布

夏履

屋麻多し 松風簾此すきし  
馬麻多し 松風簾此すきし  
保吉  
破布

汗拭

玉子の筆下所し 汗巾入  
汗拭 玉子の筆下所し 汗巾入  
春綿  
破布

土用

梨田も最身りかき 土用入  
与らるれ 梨田も最身りかき 土用入  
保吉  
春綿  
破布

土用

虫干之履 久き松ふり  
白雄



虫干の白海家ありすしれ菜 巻二  
むし干のしるも今し所も長し  
破布

本郷村

大塚静一郎

所有

大旭

夏部終



